

リダンダンシーの培われた土壌 構造家・円酒 昂

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■構造家志望へ直結

円酒昂さんは、1987年荻窪生まれで、荻窪育ちである。経営する「円酒構造設計」も生家に近い。覇志堂が「元気のいい若い技術者が出ましたね」と喜ぶ。「円酒」が覇志堂の郷里・富山県にある苗字だからなのか？ 法政大学出身、大学院では佐々木睦朗研究室、先生の紹介で小西泰孝さんの事務所に入り6年勤務した。

消極的な選択ではなく、構造設計をやりたくて進んだという強者だ。東京電機大学出身の父が自営業でサッシ図を描いていて建築士が身近だったのと、阪神・淡路大震災をテレビで見て「なんて理不尽なことが！」と構造の安全性に開眼した小学生の円酒さんがいたからだ。大学入学すぐTOTOギャラリー・間で佐々木睦朗先生の展覧会があったのも衝撃だった。構造家のスタンスとポリシーに共鳴したのが、研究室選びの伏線になったといいます。

倉田康男法政大学講師がつくった高山建築学校でセルフビルダーの岡啓輔さんと知り合い、現場も体験させてもらう。構造設計は構造家の名和研二さんと知り合って3年くらいアルバイトさせてもらったが、食事しながらの名和さんとの会話は、今でも強く影響を受けている。刷り込み！ ともいえるものなのです。

佐々木先生を抜き出した特別な構造家と理解したのは、自身が大学院生になってからだ。誰でもが佐々木先生になれるわけではないと実感した円酒さんの研究テーマは、「遺伝的アルゴリズムの最適化」。円酒さんは「怖い天才佐々木先生」に、怒られて怒られても何でも聞いた。「多分…」とか「思

った…」など、佐々木先生が嫌う曖昧な表現も指導され、随分可愛がってもらったという。就職先はアトリエと決めて先生に相談した程だった。周りは40～50歳代で成長期の構造家がいいというが、実は佐々木先生の考えであつたらしい。推薦の小西泰孝建築構造設計に入ったときは、なわけんじムでのバイトのスキルも活かしたといいます。

■独立志向を貫く

小西事務所で6年過ぎ、一級建築士も取り、いよいよ独り立ち。構造を仕事に選んだときから独立を決めていたのも、父親の影響は大きい。円酒構造設計は6年を経過したが、創業当初から営業の優先順位の三か条を軸にしている。一番は楽しんで構造設計をすること。これは名和さんから習った…なわけんじムは楽しい構造事務所なのである。二番は安全な設計をすること。これは小西さんのモットーでもある。そして、三番がいい建築をつくることなのである。

打合せで自分から提案を出すのはせっかちな性格から来るし、よい建築をつくるために能動的でありたいとの意思でもある。「実は佐々木先生を踏襲しているかも」と、思わず本音も出るのです。

福岡ビノキオこども園でも意匠設計のINTERMEDIAと、意匠や設備の領域も議論しながら提案ができたと語る。「多目的と多変数」なのだと言ったが、施工的にどうつくるか、施工条件も考えながら構造設計をすること、施工的であり構造的なのだ。小西事務所時代に設計者のTNAと実現させ、結果として世界遺産にもなった富岡製糸工場がある「上州富岡駅」がそれに当たる。

領域を跨ぐ設計が目標である。ある意味では、自分を追い詰めていくことにもなるが挑戦していきたい。余力を担保するリダンダンシーが大事なのだ。

「名前に酒が入っているしね」と紹介や飲み会つながりも営業の源。事務所テーブルにはボトルと、森博嗣さんの本が並ぶ。話題性のある闊達な会話から、確かに安全でデザイン性の高い建築をつくっていくはずの構造家だ。

